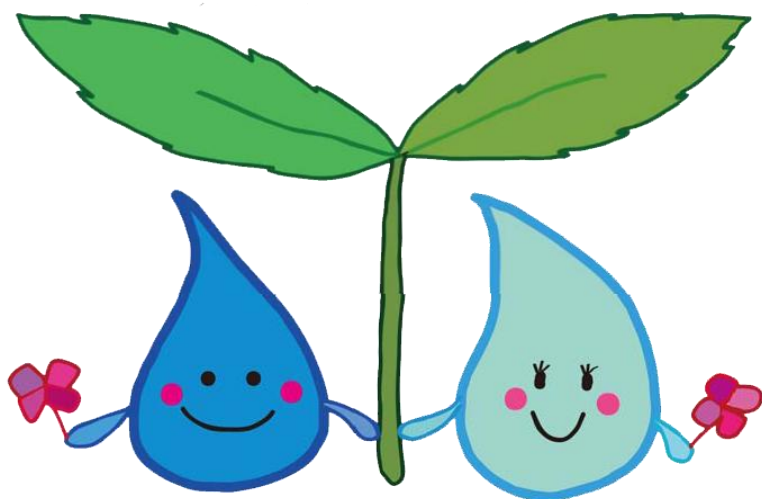


第37回

開成町福祉作文コンクール

入選作文集



みずたまちゃん



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

福祉作文コンクールは、「ともに生きる福祉社会づくり」をめざし、次代を担う町内在住の児童・生徒を対象に実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的に行われております。

第37回を迎えた今回は、町内の小・中学校合わせて221編の応募がありました。小・中学校別の審査会を経て、優秀賞6編、優良賞4編、佳作10編を決定いたしました。

本作文集は、入選された20編の作文を掲載しております。どの作文も、自らの体験を通じて感じたことや考えたことが作者の言葉で書かれています。この作文集が大勢の皆様目に留まり、思いやり、助けあい、支えあいの気持ちで社会全体に広がっていくことを期待しています。

本コンクールに参加した小・中学生の皆さん、ご指導にあたられた先生方、ご家族の皆様、ご多忙のなか審査していただきました審査員の皆様に、心からお礼申し上げます。また、ご協力いただいた、開成町教育委員会、開成小学校、開成南小学校、文命中学校の皆様にも深く感謝申し上げます。

令和7年10月

社会福祉法人開成町社会福祉協議会
神奈川県共同募金会開成町支会

審査にあたられた方々

順不同／敬称略

開成町教育委員会	上村拓也
開成町立文命中学校	杉田俊介
開成町立開成小学校	宇田晃
開成町立開成南小学校	馬淵郁乃
老人クラブ連合会	小川周作
身体障がい者福祉協会	遠藤伸一
地域支援センターひまわり	鈴木洸太
民生委員児童委員協議会	太田善人
開成町福祉介護課	中戸川進二
一般公募	石井紘子

第36 回開成町福祉作文コンクール入選作文集

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

シッティングバレーから学んだこと

開成6年

なかやま
中山 希咲
きざき

…1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

ぼくがおばあちゃんにできること

開成6年

こみやまきいち
小見山 稀一

…2

◆開成町教育長賞◆

元気いっぱいのはのぼのサロン

開成6年

えんどう
遠藤あまね

…3

優良賞

白杖を持ったおじさん

開成4年

ふるや
古谷 乃杏
のあん

…4

(ぼくの気になるおじいさん)

開成5年

しいの
椎野 廉
れん

…5

佳作

勇気を出して

開成南4年

渡部 わたなべ
敦己 あつき

∴
6

福祉との出会い

開成南5年

鈴木 すずき
柚凪 ゆずな

∴
7

「おばあちゃんの手術」

開成6年

國米 こくまい
心華 こはな

∴
8

手話はやさしさの言葉

開成5年

中原 なかはら
唯 ゆい

∴
9

車イスに乗ってみると・・・

開成5年

中島 なかじま
夕鶴 ゆず

∴
10

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

晴れ着にこめた思い

文 命3年

瀬戸^{せと}つばき

… 11

◆共同募金会開成町支会長賞◆

今のわたしが想うこと

文 命3年

大舘^{おおだて}さくら

… 13

◆開成町教育長賞◆

ヘルプマークが伝えてくれること

文 命3年

石塚^{いしづか} 諒^{りょう}

… 15

優良賞

知らなかった福祉のこと

文 命3年

中山^{なかやま} 優杏^{ゆうず}

… 17

見えないものに気づくこと

文 命3年

羽原^{はいはら}明日美^{あすみ}

… 19

佳作

みんなが幸せであるために

文 命3年

鈴木 すずき

るあ

⋮
21

祖母から学んだこと

文 命3年

杉山 すぎやま

陸翔 りくと

⋮
23

災害時の福祉

文 命3年

西海 にしがい

琉夏 るか

⋮
25

小さな手、大きな未来

文 命3年

富岡 とみおか

友菜 ゆな

⋮
27

「福祉」ってなに？

文 命3年

矢内 やない

結佳 ゆか

⋮
29

■作文の中、「障害」という言葉を「人や人の状態」を表す場合は、「障がい」と表記しています。

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

シッティングバレーから学んだこと

開成小学校

6年

なかやま
中山 希咲

私は二年前、親せきのお姉さんが所属しているシッティングバレーのチームの練習に参加させてもらいました。シッティングバレーは床に座ったまま行うバレーボールで、障がいのある人もない人も一緒に楽しめるスポーツです。最初に体育館に入った時、私はおどろきました。そこには、ひざから下の脚がない人や、脚に麻痺があり車いすで来ている人など、色々な人が集まっていたからです。普段の生活でそのような方と一緒に体を動かす機会はなかったので、「どんな練習になるのだろう」と緊張しました。

実際にやってみると、座ったまま動くのはとても難しく、思うように体が動きませんでした。目の前に落ちるボールにも追いつかず、普段のバレー

ーのようには動けません。それでもチームのみんなで声をかけ合い、「ナイスー」とはげまし合っていました。障がいがあってもなくても同じルールで真剣にプレーし、協力しながら楽しむ姿に、私は心をうたれました。

練習を重ねるうちに、「障がいがあるからできない」ということではなく、「工夫すれば一緒にできる」ということを実感しました。実際、障がいのある人たちは自分の体を工夫して動かし素早く動き、力強いプレーを見せてくれました。その姿がとても印象的でした。

この体験から、福祉とは特別なことではなく、誰もが同じ場所で共に楽しみ、支え合える環境をつくることだと学びました。

私はこれから、困っている人を見かけたら声をかけたり、相手の立場に立って考えたりできる人になりたいです。そして、シッティングバレーのように、誰もが同じ舞台で共に挑戦し、笑顔でいられる社会をつくっていく一員になりたいと思います。

優秀賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

ぼくがおばあちゃんにできること

開成小学校

6年

小見山 稀一
こみやま きいち

この前、おばあちゃんと一緒に小田原に行きました。おばあちゃんが階段を上がろうとしたら辛そうでした。ぼくは、そんなおばあちゃんにどんなことができるのか考えてみることにしました。

ぼくのおばあちゃんは、おじいちゃんがいなくなつてから体調が悪かったり、元氣じゃない時が多いです。おばあちゃんは段差で転びそうになったりもします。ぼくは、不安が多いおばあちゃんに安心してもらえるようなことをしたいと思いました。

おばあちゃんは、昔は買い物に出かけることが大好きで、お母さんとよく一緒に洋服を買いに出かけたと言っていました。ぼくは元氣がないおばあちゃんがまた大好きな買い物に行けると元氣が出ると思います。足やこしが痛いおばあちゃんの手をとって、一緒に歩いてあげると、おばあちゃん

は安心して出かける事ができると思います。さらに、最近耳が遠くなつたおばあちゃんは、人が話している時に話しが聞こえないことがあります。

そんな時には、代わりに話を聞いておばあちゃんに伝えてあげると、おばあちゃんは人と話すのがもっと楽しくなると思います。人と話すことは、おばあちゃんにとって元氣でいるための材料の一つだと思います。

おばあちゃんをよく、「一人じゃさみしい」と言っています。ぼくは弟と話合つて、宿題が終わつたらおばあちゃんの家に行つて、様子を見ることに決めました。いつもおばあちゃんの近くにいて、ぼくや弟の一日の出来事を話してあげます。一緒にごはんを食べたりもします。まるでおじいちゃんそぼにいる時のような毎日を一緒に過ごす事で、おばあちゃんがいつまでも元氣でいられるとうれしいです。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

元気いっぱいのはのぼのサロン

開成小学校

6年

遠藤 えんどう

あまね

私は、おじいちゃん、おばあちゃんとはなれて暮らしています。なので、お年寄りと話すときに少しきんちようしてしまいます。そこで、夏休みに福祉会館の「ほのぼのサロン」に行きました。関わり方が分かると思ったからです。

まず、おばあちゃんが部屋に入ってきたとき、まるで自分のクラスのような元気な声が飛びかっ
ていてびっくりしました。最初に、「カーレ
ット」というゲームをしました。カーレットは、ス
トーンを的に一番近くすべらせたチームが勝ちと
いうテーブルカーリングです。誰もが楽しめるデ
ームで、私も簡単にできました。最初おばあちゃ
んに話しかけるのがきんちようしたけど「カーレ
ット、やったことありますか」と聞いてみたら笑
顔で話してくれて仲良くなれました。

次に○×クイズをしました。おばあちゃんと協
力して答えを考えることが楽しかったです。おば
あちゃんも「こうやって若い子たちとふれあえて
よかった。こういう機会は、なかなかないから。」
と言ってもらえてすごうれしかったです。みん
などふれあいたいと思っていることを知って、ほ
のぼのサロンなどに来ていない子にも来てほしい
なと思いました。

この前に、私が大阪関西万博に行ったときも、
日本や外国のお年寄りがたくさんいてすごく元気
でした。そのことから、お年寄りは大事にしくな
てはならないと特別あつかいしてしまうけど、元
気に話をしてくれる人に会って、身近な存在なん
だなと思いました。だから、またお年寄りとおふれ
あう機会が増えたらいいなと思いました。それ
と、自分がお年寄りになったら子どもたちにもた
くさん話しかけてもらいたいし、話しかけたいと
思います。

優良賞

白杖を持ったおじさん

開成小学校

4年

古谷 ふるや
乃杏 のあん

私が、下校をしていると、時々白杖を持ったおじさんを見かけます。

その日もいつものように友達と帰っていると、あのおじさんが交差点の近くで困っていました。近づいて、そっと声をかけることにしました。

「こんにちは、大丈夫ですか？」と、聞くと、買い物へ行くところの段差で、進めなかったそうです。私達の帰り道方向なので、一緒に行くことにしました。

おじさんの話では、点字ブロックがない道を歩く時は、特に気を遣わなければいけないそうです。段差や、スピードを出した自転車、音の出ない信号機など、ふだん私達が何気なく歩いている通学路にもきけんがたくさんありました。

話をしていると、お店に着いたのでこの日の案

内は、終了。

その夜、おじさんが言った、

「ありがとう。またね。」

と、言う言葉を思い出しました。

外出するたびに、ありがとうや、すみませんと、だれかに気を遣う事でもっとつかれてしまうのではないのだろうか。

そんな障がい者の人達が、住みやすい町になってほしいと思います。

そして、思いやりの心を持った「すてきさん」になりたいです。

優良賞

(ぼくの気になるおじいさん)

開成小学校

5年

椎野 廉しいの れん

まだしっかりと話したことはないけれど、ぼくには気になるおじいさんがいます。そのおじいさんは、ぼくが学校がおわって友達と遊んでいるときによく見かけます。めずらしい赤と白のつえをもっていて、いつもゆっくりゆっくりと歩いていきます。リュックには、マークが書いてある赤いカードがぶらさげてありました。あのカードは何だろうと思って調べてみました。

そのカードは、ヘルプマークといって、えん助が必要な人がつけるカードだそうです。見ただけではわからないけど、助けが必要で、こまっていたら声をかけるようにするのが大切だと書いてありました。赤と白のつえは、目の不自由な人が使うためのつえでした。ぼくの気になっていたおじいさんは、視覚障がい者だとわかりました。

ある日、ぼくが自販機でのみものを買おうとしたとき、お金がつまってしまい困っていると、あのおじいさんが声をかけてくれて助けてくれました。やさしく声をかけてくれて、ぼくが近くにあるお店の人をよびにいてくれるあいだ、ずっと心配して待っていてくれました。目が不自由で歩くのも大変なのに、気づいて助けてくれてすごいと思います。

ヘルプマークのことをぼくは知らなかったけど、おじいさんのおかげで知ることができました。もし困っている人がいたら助けたり、ヘルプマークをつけている人がいたら自分から勇気をだして声をかけてみようと思います。

佳作

勇気を出して

開成南小学校 4年

わたなべ あつき
渡部 敦己

「へえーそうなんだ。」学校で点字ブロックのことを知ったとき、ぼくはそう思いました。

それから、ぼくは点字ブロックが気になりました。

あるときぼくは、家族で出かけているとき点字ブロックがとぎれているのを見つけました。「目が見えない人は、この先どうやって歩くんだろう？」と不思議に思いました。そのことをお母さんに話すと、ある新聞記事を見せてくれました。その新聞記事には、大分県の商店街にある点字ブロックの話がのっていました。そこでは、マンホールのふたにも点字ブロックがついていて、そのふたがずれたまま3か月半も、そのままになっていたそうです。点字ブロックがずれるとあやまった方向に進み、目的地にたどりつけなくなる可能性があると、新聞記事には書かれていました。そ

れはとてもこわいことだと思いました。

ぼくはためしに、家の近くの道を目をつぶって歩いてみました。点字ブロックがないと、ななめに進んでしまうし、自転車が来ていることも分からなかったのでもいつも通っている道だったけど、すぐくこわかったです。

この体けんや新聞から、ぼくができることは、何かを考えてみました。

それは、おかしな点字ブロックを見つけたら、すぐにだれかに言うこと。そしてもし、こまっっている人がいたら声をかけること。でも、ぼくにはむずかしいと思いました。なぜなら、あまり勇気がないからです。だけど、ぼくが体けんしたことを思い出して、こまっっている人の気持ちを考えてらすこしは勇気が出て、声をかけられると思いました。

佳作

福祉との出会い

開成南小学校

5年

鈴木 柚風
すずき ゆずな

福祉について考えたとき、私が一番に思ったことは「ユニバーサルデザイン」です。「ユニバーサルデザイン」とは、健常者でも障がい者でも、だれでもわかるデザインのことです。授業でそのことを知ったときから、私たちが生活しているなかでたくさんさんの「ユニバーサルデザイン」を発見しました。

私がおどろいたのが、牛乳パックです！牛乳と乳飲料との違いがわかるように、牛乳パックのほうは、上がへこんでいました。また、へこんでいるほうとは反対側が飲み口になっているそうです。目の不自由な方たちから、わからないという声が多かったことへのユニバーサルデザインだということでした。

私が家族とお出かけをしたときの話です。私に

は、妹や弟がいますが、お出かけをするときベビーカーを使います。その時は階段ではなく、スロープを使って移動しています。車いすを使っている人や、足や目が不自由な人にとってもスロープは大事な道です。普段何気なく使用している場所が、たくさんの人たちの大事な道になっていることに、気づくことができました。そして、もう一つの大事なことを知りました。

それは「点字」です。点字はいろいろなところにあります。アルミ缶の上であったり、銀行のATMにもあります。シャンプー、コンディショナーのボトルの上には片方のキャップの上にへこみがあり、違いがわかるようになっていきます。外にある点字ブロックは「危ない」と私たちに教えてくれます。

私たちが日々何気なく暮らしているなかに、こんなにもたくさんさんの「やさしさ」が溢れていることに、私は気づくことができました。私はまだ福祉関係のことでは経験不足なので、ボランティアなど通しているいろいろな方たちと触れ合っていくたいと思っています。

佳作

「おばあちゃんの手術」

開成小学校

6年

こくまい 國米

こはな 心華

「あーたん、手術するんだって。」

と、母に言われ、私は、どうしたんだろう、だいじょうぶかな、と思いました。あーたんとは、秋田県にすんでいる私のおばあちゃんです。とても元気で、料理が上手で優しいおばあちゃんです。

今年は習い事が多く、夏休み中に秋田県に行くことができないので、電話をして様子を聞いてみました。おばあちゃんは、「白内障」という目の病気にかかってしまったそうです。その病気は、老化に伴う視界不良だそうです。おばあちゃんは、車の運転中に看板が見えにくいし、視界も狭くなつて運転が不自由になってしまったそうです。新聞も眼鏡をかけても見えなくて、読むのに困ったので、病院に行ったら手術をすることになったそうです。手術は怖かったけど、全然痛くなくて、手

術をした後は世界が見えやすくなって楽になったそうです。手術が成功したので、私はとても安心しました。

病気の時は、床に落ちているほこりやかみの毛が全然見えなくて、家事をフォローしてほしかったそうです。おばあちゃんの病気は治ったけど、秋田に行ったら、料理やお風呂洗いや掃除などお手伝いしたいと思います。そのために、ふだんから家のこともやろうと思いました。いつもは言われてからやっているの、進んでやってみようと思いました。

また、おばあちゃんは、草むしりをしているときに、小学生が元氣にあいさつしてくれるそうです。そうすると、おばあちゃんも元氣になるそうです。私は、おばあちゃんとはなれてくらしているけど、秋田に行ったときは元氣にあいさつして、元氣をあげたい、と思います。さらに、朝や帰りに見守ってくださっている方や、地域の方にもあいさつをして、みんなが元氣になれるようにしたいです。

佳作

手話はやさしさの言葉

開成小学校

5年

なかばら
中原 唯

わたしは、耳が聞こえない人が日本にいっぱいいると思います。だから、耳が聞こえない人たちの助けになっている「手話」について書くかと思いました。

学校の福祉の授業で、わたしたちは、スライドとかをつくりながら勉強しました。紙や動画を使いながら、「こんにちは」や「ありがとう」などの手話をおぼえました。手で色々な形をつくるだけで言葉が伝わることに、びっくりしました。とても楽しかったから、おぼえて家でもやってみました。はじめは、「手話って耳が聞こえない人のためかな？」と思ったけど、勉強するうちに「耳が聞こえない人のための言葉」だとわかりました。でも、どちらの人にもやさしい気持ち伝わる言葉だと思いました。耳が聞こえない人は、ふつうの

声での会話がむずかしいけれど、手話があればお話しができます。気持ちも伝えることができます。わたしも手話で、「こんにちは」と言えるようになったので、いつか本当に手話が必要な人と出会ったら、つかってみたいです。たとえ少しだけでも、相手が「うれしい」と思ってくれたらいいなと思います。

福祉という言葉はむずかしく感じるけど、だれかのためにできることをすることだと思いました。手話をならったことで、やさしい心が少し大きくなった気がします。これから、もっと手話をおぼえて、だれかの力になれるようにがんばりたいです。

佳作

車イスに乗ってみると…

開成小学校 5年

なかじま
中島 夕鶴 ゆづ

車イスに乗っている時と、立っている時と、
つてもちがいます。

どこがちがうのかをしよう紹介します。一つ目
は、目線です。あなたが健康な人と立ち話をして
いる時は、ふつうに楽しく会話出来ます。

しかし車イスに乗っている人と、立っているあ
なたで会話をすると車イスの人は、目線が低いの
でこわい思いをしてしまいます。

これが目線のちがいです。

二つ目は、不便さです。

まず、トイレの不便さです。車イスでは、みん
なのトイレじゃないと入る事ができません。なぜ
かというと入り口がせまくて、車イスで入れない
からです。なのでトイレしたい時に入れないとこ
まります。だからあまりみんなのトイレに入らな

いようにしましょう。そうすればほんの少し身体
不自由(車イスに乗っている人)の役に立てます。

次は車イスに乗っていい事です。

車イスに乗っている人に、いい事なんかはないと
思うでしょう。それがあるんです。それは、とて
もやさしい人に出会える、仲よくなれるという事
です。車イスに乗っている人達を助けてくれるの
はとても心やさしい人です。だから助けてくれた
人がいっぱい話しかけてくれたりして友達になれ
る。それは、とてもうれしくて、良い事なのでは
ないのでしょうか。わたしはこう思います。車イ
スに乗ってる人はいやな事ばかりじゃない楽し
い事やうれしい事もたくさんあるはずです。

そしてわたしは、そのうれしい事楽しい事をふ
やせるように見かけたら声をかけたりしていたい
なと思っています。そして、それを行動にうつし
ていきたいと思いました。

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

晴れ着にこめた思い

文命中学校

3年

瀬戸 つばき

今年の一月にいとこが成人式を迎えた。

家族や親戚みんながいとこの晴れ着姿を楽しみにして、数年前から計画を立てていた。当日のヘアセットや着付けは美容院ではなく、家族と親戚が協力して自宅で行った。そのため、成人式当日を迎えるまでに何度も着付けの練習を重ねた。

私も着付けの練習台として、何度も振袖を着させてもらった。着付けの手順や道具の使い方などを、着せられる側の私が覚えてしまうほど何時間もかけてじっくり練習した。帯の締め付けの苦しさや振袖の重み、一時間以上じっと立ち続ける疲れなど、成人式に振袖を着ることの大変さを一足早く体験することができた。そして、自分が成人式を迎える

五年後には、どんな振袖を選ぶのだろうと未来の自分を想像した。

美容院にお願いしなかった理由は、いとこが障がいを持っているからだだった。いとこはとても小柄で物静かで、少女のような雰囲気を持った女性だ。決まった生活のリズムをとっても大切にされていて、慣れない場所や雰囲気の中では不安になってしまいうことがあった。

せっかくの成人式に、いとこに少しでも安心して準備してもらいたいという思いから、いつもと同じ自宅の環境でみんなを支え合いながら着付けをした。

いとこはひとりで成人式に参加することが難しかったため、市の成人式には親が介助のために同伴して出席した。「友達に会えるかもしれない」と楽しみにしていたが、会場は大勢の人であふれており、友達の姿を見つけることができず、とても残念がっていた。それでも慣れない振袖で成人式に参加し、周囲の人から「おめでどう」「きれいだね」とたくさん声をかけられ、少し照れながらもとても嬉しそうにしていた。そんないとこを見て、私も嬉しくて胸がいっぱいになった。

その数日後、いとこが卒業した支援学校の成人を祝う会が開かれた。その日、支援学校の友達は緑色の振袖を着て参加し、笑顔で嬉しそうに過ごしていたが「本当は自分の住んでいる町の成人式にこの振袖を着て出席したかった」と悔やんでいたそうだ。

町の成人式では「保護者同伴不可」とされていたため、「障がいがあり、介助が必要な新成人なので付き添わせてほしい」と事前に問い合わせをしたが、それでも許可は下りなかったという。仕方なく参加をあきらめ、支援学校の祝う会にその振袖を着て出席していた。

その友達と家族は、とてもショックを受けたそうだ。その日をどんなに楽しみにしていたかを知っているからこそ、それが叶わなかった現実が悲しくて、私も胸が張り裂けそうだった。

成人式は、誰のための行事なのか。もちろん、会場の運営にはさまざまな事情や制限があることも理解している。でも、人生に一度きりの大切な日だ。誰もが安心して参加できる方法を、もう少し工夫できなかつたのだろうかと考えさせられた。

晴天だった成人式の日、真っ青な晴れ着姿で照れながら笑っているいとこの写真を見て、改めて感じ

たことがある。それは、「誰か思いやることの大切さ」だ。家族や周りの人たちが「その人にとって一番良い方法は何か」を考え、行動することで、不安な場面も安心できるものに変えられるのではないかと思う。

どんな人も、その人らしく人生の節目を祝える。それが当たり前になる社会になってほしい。そして、誰もが笑顔で大切な日を迎えられるように、私も思いやりのある行動ができる大人になりたい。

優秀賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

今のわたしが想うこと

文命中学校

3年

おおだて
大館 さくら

今、社会はどんどん便利になっています。A I を使ったサービスやスマートフォンアプリ、キャッシュレス決済など、私たち若い世代には当たり前のように使っているものが多くあります。しかし、ふと思ったことがあります。それは、高齢者の方々にとっては、その「便利さ」が逆に不便や不安につながっているのではないかということです。

例えば、病院の受付や町役場の手続きが、タッチパネルやオンラインで行う方式に変わってきています。私が母と一緒に病院に行ったとき、お年寄りの方が受付の機械の前で戸惑っている姿を見ました。画面の文字が小さかったり、手順が複雑だったりして、操作ができなかったのだと思います。それを見かけた看護師さんがお手伝いをしていたので

なんとかりましたが、もし一人だったらどうしていたのだろうと思うと、心配になりました。

また、買い物に行ったときにも、セルフレジが増えていて現金よりも電子マネーの方がスムーズに使える仕組みになっていました。私の祖母はお金をしっかりと数えて払うため、電子マネーは使っていません。そのため、少し時間がかかる時もあり、昔にはなかった周りの目を気にしてしまうかもしれません。

このように、社会のデジタル化やA I 化が進む中で、高齢者の方々が「取り残されている」と感じる場面が多くなっていると私は思います。もちろん、新しい技術は生活を便利にしてくれるし、効率も良くなるかもしれませんが、でも、使えない人や慣れない人にとっては、それが不安やストレスになってしまいます。

福祉とは、「すべての人が安心して生きられること」を目指すものです。だからこそ、新しい技術を進める一方で、誰かが置いていかれるような社会にしたいけないと思います。特に高齢者の方々は、私たちが今生きている社会をつくってきてくれた世代です。その人たちが「肩身がせまい」「自分ほ

う役に立てない」と感じてしまう世の中でよいのでしょうか。私はとても心苦しく思います。

私は福祉の本当の意味は、「誰かの役に立つこと」ではなく、「誰もが大切にされること」だと思います。だからこそ、これからの社会には「使えないなら使わなければいい」ではなく、「どうすれば使えるようになるか」「わからない人をどう助けられるか」といった、思いやりの視点が必要だと思います。

例えば、機械の横にスタッフが常にいて説明してくれたり、アナログの部分も残したりすることで、高齢者の方々も安心して利用できるようなことになると思います。私たち若い世代も、困っている人がいたら声をかける習慣を持つことが大切です。ちょっとした配慮や声かけが、誰かの「生きづらさ」を軽くすることにつながるからです。

今の日本は、少子高齢化が進んでいます。つまり、これからはますます高齢者が増えていく時代です。だからこそ、高齢者が生きやすい社会をつくることは遠い未来の話ではなく、今すぐ向き合うべき課題です。そして、それは「特別なこと」ではなく、身近なところから始められることでもあります。

私は、誰もが安心して暮らせる社会のために、自分にできることを見つけていきたいと思っています。例えば、家の中でスマートフォンを使い方を祖母に教えることや、町で困っている人がいたら手を貸すこと。そういった小さな行動が、きっと大きな福祉につながるのだと思います。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

ヘルプマークが伝えてくれること

文命中学校

3年

石塚 諒 いしづかりょう

私はあるポスターが、ずっと忘れられませんか。「助けてくれたのは、知らない人。だけど、知ってくれていた人。」と書かれた、ヘルプマークのポスターです。

春、家族でお花見に行ったときのことです。遠くのベンチに座っていた女性のかばんに、一際目立つ、真っ赤な札がついているのが見えました。札には白色で十字架とハートがかかれていて、私は病院関係の何かかなと少し不思議に思いました。ポスターでヘルプマークを知ったのは、それから少し経ってからです。あの女性がつけていたのはこれだと、すぐに分かりました。ヘルプマークとは、外見からは分からないものの、援助や配慮を必要としている人が、周囲にそのことを知らせるためのものだそうです。札の裏には自分の症状について記入することがで

きて、義足や人工関節を使っている人、内部障がいや難病を患っている人、妊娠初期の人など、支えを必要とする理由はさまざまでした。私はとてもやさしいマークなのだなと思いました。

ある日、駅で人混みの中を進んでいると、前の方を歩く人の黒いリュックサックにあのヘルプマークがついているのを見て、私は驚きました。その人が、私と同じ歳ぐらいの男の子だったからです。若い人でも助けを必要としている、今までお年寄りや妊婦さんへの気遣いばかり意識していた私にとって、大切な学びになりました。そこで私は、ヘルプマークについてもっと知ってみようと思いました。

まず、インターネットでホームページを見てみました。ヘルプマークは平成二十四年に東京都が作成したのが始まりだそうです。それから全国に広がり、神奈川県には平成二十九年に導入されました。また、今年から七月二十日は「ヘルプマークの日」と定められ、障がいへの理解が求められています。

ホームページ内には、ヘルプマーク利用者のエピソード集もありました。どれもあたたかい気遣いややさしさが感じられるストーリーで、マークのありがたさが伝わりました。それでも中には、もっとた

くさんの人に知ってもらいたいという声もありました。そこで、家族にヘルプマークを知っているか、きいてみました。すると、小学生の妹は全く知らず、父は、

「きいたことはあるけれど、よくわからないよ。」

と言いました。一方母は、

「助けが必要な場合のある人がつけているものだよね。」

と答えてくれ、知っていたのは母だけでした。まだ広く知られていないということが、実感できました。

ヘルプマークは、言葉にできない SOS を代わりに伝えるくれる、つよくてやさしいマークでした。助けてほしい側にも、助けてあげる側にも、なくてはならないものです。これからもっと広まってほしいと思いました。そして私は、もしマークを身につけた人がいたら、あたたかい気遣いをしてあげたいです。小さなやさしさが、幸せな社会をつくるための大きな一歩だと、ヘルプマーク利用者の声から学びました。人と人との支え合いで、世界がもっと鮮やかになっていくといいです。

優良賞

知らなかった福祉のこと

文命中学校

3年

なかやま
ゆず
中山 優杏

「自分のまわりに、耳が聞こえない人や目が見えない人はいるだろうか」と聞かれたら、私はすぐに「いない」と答えてしまうかもしれません。私も今まで、福祉のことはそんなに深く考えたことがありませんでした。

でも、ある日、私の町で白杖を持ってゆっくり歩くおじいさんを見かけました。その慎重な歩き方からは、一步一步に氣をつかっている様子が伝わってきました。私は「この人は大丈夫かな」と少し心配になりました。夕暮れ時なので、まわりに人はあまりいませんでしたが、バスを待っているときに数人がそのおじいさんのことをちらりと見ているのがわかりました。そのとき、「自分のまわりにはいない」と思っていたけれど、実は気づいていなかっただけ

なのかもしれないと思いました。福祉は、思っていたよりもずっと身近にあるのだと感じました。

そんなことを考えていたころ、原宿の駅で手話を使って会話をしている兄妹を初めて見ました。「あ、この兄妹は耳が聞こえないんだ」と気づいたとき、私は少し驚きました。手話は複雑な動きや表情があって、とても難しそうに見えました。私は「手話を覚えるのにどれだけ時間がかかったのだろう」と考え、きっと大変なことも多いだろうと思いました。もし自分だったら、毎日不安なことともたくさんあるのではないかと感じました。

白杖のおじいさんや手話の兄妹を見て、私は「いない」と思っていたけれど、実は自分のすぐ近くにいたのだと気づきました。きっと私が気づいていなかったただけだったのです。彼らがどんな思いで生活しているのか、少しでも想像できるようになりました。私たちにもできることはあるはずです。でも、手話もできないし、目が見えない人への声のかけ方もわかりません。だからこそ、「何をすればいいのかわからない」で終わらせるのではなく、「まず知ろうとする」ということが大切なのではないかと感じました。

特別なことはできなくても、「気づこうとする姿勢を忘れない」ことは、きっと誰かの力になれると思います。そしていつか、少しでも手話を覚えたり、困っている人に声をかけられるようになればいいなと思います。ドラマで手話を使っているシーンを見たとき、「これができたら助けになれるかもしれない」と思ったことがあります。でも、手話を覚えるのはとても難しいことだとも感じました。それでも、「知らないままで終わらせたくない」という気持ち大切にしていって、これから少しずつでも福祉について学んでいきたいと思います。

優良賞

見えないものに気づくこと

文命中学校

3年

羽原 はいばら

明日美 あすみ

私は、最近心の健康について考えることがある。自分が学校生活の中で友達関係や勉強のことで不安になったり、友達が落ち込んでいてもなかなか声をかけられなかったりする。

そんなときに、「精神保健福祉」というものがあることを知った。「精神保健福祉」とは、すべての人の心の健康を保持・向上させる活動をすすめていくことだという。

例えば、保健室の前などにある相談窓口のポスター。これは、今は困っていなくても、「自分も何かあったら相談していいんだ」と思えるため、安心感がある。

今まで「福祉」と聞くと、介護や保育など、目に見える形を思い浮かべていたが、「精神保健福祉」は心の健康に関するものだから、目に見えにくい。し

かし、それは誰にとっても大切なことであると考え。なぜなら、「精神保健福祉」が人の心を支える力になるからだ。

私は、家族のひとことで心が支えられた経験がある。勉強や習い事など、やるべきことが多すぎてどうしていいか分からず、落ち込んでいたとき。

「無理しなくていいんだよ。」

私は家族のこのひとことで気持ちが楽になり、心が支えられた。

このように、落ち込んでいる人に静かに寄りそう気持ちだが、心の健康を保つことにつながり、福祉と結び付いてゆくのだと思う。

心の不調は、がまんしすぎると自分をどんどん追いつめてしまう。そうならないために、少ししんどいなど感じたら助けを求めたり、誰かに相談したりすることが大事だと思う。

しかし、心のことを話すのはとても勇気がいることだ。私も相手からどう思われるか心配になったり、「こんなことで相談していいのかな」と感じることもある。だからこそ、話しやすい空気や、静かに寄りそってくれる人の存在が大きな支えになる。

私は、目に見えない福祉「精神保健福祉」を通じて、私たちが心の健康を保持するためにできることを知ることができた。

例えば、私が落ち込んでいたときに家族に声をかけてもらったことのように、周りの人のちょっとした変化に気づき、声をかけること。また、日常生活の中でも明るくあいさつをするなど、周りの人との心の輪を築くこと。これらが、一人ひとりが心の健康を保つことにつながってゆくのだ。

目に見えない心の声に気づき、手を差し伸べられる人が増えたら、社会はやさしくなっていくと思う。私はそのような環境がもっと広がってほしい。

私もこれから、周りの人の様子、表情をよく見て落ち込んでいる人がいたらやさしく声をかけられるようになりたい。目には見えないけれど、心は誰にとっても大切なものだ。だからこそ、お互いを思いやる気持ちを忘れずに、日々を過ごしていきたい。

一人ひとりが心の健康に対する理解を深め、お互いに支え合う。それこそが、誰もが安心して暮らせ

る社会をつくるための第一歩なのではないだろうか。

佳作

みんなが幸せであるために

文命中学校

3年

鈴木 すずき るあ

私には、関節リウマチの持病がある祖父がいます。この病気は免疫の異常によって関節に炎症が起こり、痛みやはれが生じる病気です。進行すると関節の変形等で日常生活に支障をきたすことがあります。治療薬によって糖尿病や間質性肺炎等の合併症を引き起こすこともあります。私の祖父はリウマチだけでなく合併症を起こし、日常生活に様々な影響が出ています。例えば、起床時、体がこわばり歩くことが難しかったり、買い物や外に出るときはお店のカートや杖、押し車がないと長時間歩くことが困難です。それに加え、息切れをするので休みながら歩いています。足腰が痛い等の症状がありますが、プールに行つてウォーキングしたりリハビリに行つたりと鍛えるために頑張つています。私も一緒にプールや散歩に行きますが、少しずつ歩ける距離が

長くなつたり、息切れすることも少なくなつていきます。

私は一緒にどこか遊びに行つたときに、「ここにもっとこれがあればいいのにな」と思うことがあります。例えば、車椅子の貸し出しの際に貸し出しのスポットが少なかつたり昔からある手動の車椅子だけでなく、腕が不自由な方でも使用できるような車椅子も設置してほしいなと思います。電車に乗る時も、一人で乗れるように電車とホームの間のスロープを自動化して、車椅子の人だけでなく、身体が不自由ではない人も怪我や事故が減るのではないかと考えました。身体が不自由な人は「まわりの人に迷惑をかけてしまう。」と思ひ、外に出ない人になると思ひます。そう思うような人を見捨てずに少しでも減らしていきたいです。そのためには、バリアフリーの設備を増やすことが大切だと思ひています。私はウェディングプランナーという大きな夢があります。人の幸せに携わる仕事に就きたいという理由もありますが、私の祖父のような身体が不自由で「結婚式を挙げたくても挙げられない。」と諦めてしまふ人も私がサポートをしたいと思ひています。例えば、ウェディングドレスやタキシードなど服装

も障がいの有無関係なく着れるようにしていくなど全員が同じ立場にしていることを目指していきま
す。私にとって結婚式は人生で最も笑顔が集まると
きだと思っています。身体が不自由だからと諦める
のではなく、「結婚式を挙げてよかった。」と言って
貰えるよう、お手伝いしたいと思っています。「病氣」
イコール「暗い」「悲しい」や「外に出れない」では
なく、病氣や身体が不自由になっても自分らしく生
き生きと生きていける社会になっていくことを願
い、私になにができるか、考えていきます。

佳作

祖母から学んだこと

文命中学校

3年

杉山

陸翔

すきやま りくと

僕の曾祖母は十年程前から認知症が進み、四年前に九十三歳で亡くなりました。

曾祖母が元気なころは自宅のある伊勢原から、僕の家の近所に住んでいて祖母の家によく一人で電車に乗って泊まりに来ていました。その時は僕も祖父母宅に行き一緒にご飯を食べたり、遊んでもらったりしていました。僕も曾祖母の家に祖母や母と遊びに行ったりしていました。とても優しく穏やかな曾祖母で、その頃は一人で何でも出来ていました。しばらくして階段から落ちてケガをしたことが原因で、家にいることが多くなり、認知症の症状が始めました。

その頃曾祖母宅へ遊びに行くと、僕のこと全く分からなくなっていました。何回も名前を聞かれ、

「どこから来たの?」「何歳?」と何度も尋ねられました。その度に何度も何度も答えました。

自分の孫である母のこともわからなくなっているのですが、急に母のことを孫だと分かる時がありました。他には、とつくに亡くなった曾祖父がまだ生きていると言ってみたり小さいころの自宅の様子や兄弟のことを詳しく話してくれたりしました。今のことがわからないのに、昔のことはよく覚えていたのでタイムスリップしたような感じで、話が現実なのか夢の中の話をしているのかわかりませんでした。

そんな曾祖母の相手を祖母は否定せず相手をしていてすごいなと思いました。

だんだん身の回りのことも出来なくなり、認知症の症状が進み、曾祖母は施設に入所しました。

僕は春休みや夏休みなどの際は、祖父母や母とお見舞いに行きました。曾祖母は僕や母のこと、祖父のこともわからなくなっていました。でも祖母のことは分かっていたようです。でも不思議だと思ったことは、大好きだった歌は忘れなかったようで、楽しそうに歌ったりしていました。祖母も一緒に歌ってあげたりしていました。

このように、認知症になっても、曾祖母から教えられることがたくさんあります。祖母は介護するときに曾祖母を一人の大人の女性として接し、支えていました。

認知症の方を介護するということは、おだやかな日々ばかりではありません。全く道理の通らないことを言って怒ることもあって、介護する祖母とけんかになったりもしました。でもテレビや本でしか知らなかった認知症という病気が身近に起こって、それでも曾祖母は一生懸命生きていたということがわかり、とても尊敬しています。介護している家族や施設の介護士の方はとても大変だということも分かりました。曾祖母の時は僕もまだ小学生で介護はできませんでしたが、この経験を活かしその時が来たら支えられる存在でありたいと思います。ただ、介護は一人で抱え込むと心も体も疲れてしまいます。だから、自分一人で全部背負おうとせず、家族や周囲と助け合いながら支えていきたいです。また、認知症についてもっと正しく知ることも大切だと感じました。病気に対する理解があれば、相手の気持ちに寄り添いながら接することができると思うからです。

介護は決して楽なことではないけれど、大切な人进行いやる心があれば、乗り越えられると祖母が教えてくれました。僕も誰かの支えになれるような大人になりたいと思います。

佳作

災害時の福祉

文命中学校

3年

西海 にしがいい 琉夏 るか

最近、日本では大きな地震や台風が多くなってきた。『もし自分の町で大きな災害が起きたらどうなってしまうのか』と考えるようになった。ニュースやSNSで見るたびに、避難所にたくさんの人が集まり、毛布や食料を受けとっているところを見て、『助け合っていて大切だな』と思った。そこから、災害時にも『福祉』が関わることを知った。

この前、学校の道徳の授業で、避難所について学ぶ時間があった。そこで、段ボールの部屋や簡易トイレについての話をきいた。他にも避難所についてもっと知りたくなったので家に帰ってから調べてみると、車いすを使っている人や赤ちゃんを連れた人、高齢者などの人たちのために、特別なスペースが用意されている避難所があると知った。そのこと

から、避難所は、ただ寝るだけの場所ではなく、安心できる場所であるべきだと考えた。

私は、もしまわりの人にけがをした人が出たら、どう助けるかを考えた。自分は中学生で、小学生やお年寄りの人よりも体力がある。だからこそ、中学生の私たちにできることがたくさんあるのではないかと考えた。例えば、荷物を運んだり、困っている人に声をかけたりするなど、小さなことでも誰かの役に立つために行動するべきだと思った。

また、避難所でのトラブルの話もときどき耳にする。プライバシーが守られなかったり、食料や物資がたりなかったりする。特に体の不自由な人や、まわりに助けを求めにくい人にとっては、避難所生活がとても大変になることがあるそうだ。そこで、福祉の考え方が必要になる。誰もが同じように安心して過ごせるように、まわりの人が少しずつ気づかひをすることが大切だと思った。

つまり、災害時の福祉とは、大きな地震や台風などが起こったときに、体の不自由な人や高齢者、小さな子どもや赤ちゃんを連れた人など、さまざまな人が安全に避難できるように手助けをしたり、特別な配慮をしたりすることだとわかった。例えば、車

いすの人が避難所に入りやすくするためにスロープを設置したり、耳が聞こえづらい人にもわかるように文字や絵で情報を伝えたりすると、みんなが安心して過ごせる避難所になると思う。また、そのような避難所が増えてほしいと感じた。災害のときは、みんなが同じように行動できるとは限らないので、ひとりひとりに合った支援をすることが大切だと感じた。

また、「福祉避難所」という場所があることを知った。福祉避難所とは、特に支援が必要な人のために用意される特別な避難所で、そこには介護士や看護師がいたり、静かな部屋やベッドがあったりして普通の避難所よりも落ちついて過ごすことができるようになっていく。さらに、耳が聞こえづらい人には手話通訳者がいたり、目が見えない人には音で情報を伝えたりするサポートも少しずつ増えてきていることも知った。しかし、全ての地域でこのような設備が整っているわけではないので、日ごろからの準備が必要になる。

福祉というと、病院や介護のイメージがとても強く、災害と結びつけて考えることがなかった。しかし、災害が起きたときにも、福祉の心はとても大切

だ。困っている人がいたら、自分から声をかけるなど、今、自分に何ができるのかを考える。これをひとりひとりが意識して行動することで、避難所はもっと安心できる場所になると思う。

これからも災害はいつどこで起こるのかわからない。だから、福祉の視点を持って防災について考えることが、未来の自分や、まわりの人を守ることにつながると思う。私は、いざというときに誰かを支えられるような人になりたい。

佳作

小さな手、大きな未来

文命中学校

3年

富岡 友策
とみおか ゆな

私の母は保育園の先生として働いています。私は小さい頃から母が勤めている保育園に通っていました。保育園には沢山のお友達と先生がいて、先生たちはいつも登園すると笑顔で名前を呼んで「おはよう。」と明るく声をかけて迎えてくれたのを覚えていてます。保育園では遊んだり制作をしたり、給食を食べたりお昼寝をしたりと今思えば長い時間を過ごしていましたが、寂しいと思ったことはなく優しい先生たちと過ごした楽しい思い出で溢れています。

私が保育園を卒園してしばらく経った今でも、母といるときにお世話になった保育園の先生たちと会うことがあります。そのときには「大きくなったね。」と声をかけて昔の思い出話などを聞かせてくれます。先生たちが何年も経ったのにその時のこと

を覚えてくれていることや、成長を嬉しそうに話してくれることがとても嬉しく感じました。私は昔から良いことをしたら沢山褒めてくれる、嬉しいことがあれば一緒に喜んでくれる、いけないことをしたらちゃんと叱ってくれる、そんな先生たちが大好きです。保育園や保育園の先生たちのおかげで私はここまで成長できたのだと思いました。

保育園は子どもたちの心理や身体的教育、社会的、教育的成長に欠かせない大切な場所です。私の母に保育について聞いたとき、保育士は子どもが一日長い時間を過ごす保育園であるからこそ、安全に楽しく過ごせるように様々な工夫をしていると言っていました。私がつづいていたときにも担任の先生だけでなく、色々な先生が様子をみて声をかけたり遊んでくれたりと、保育園で過ごす時間は楽しいものばかりだったと思います。また、親が子どもを育てるときに困ったことがあったら相談にのって、食事や睡眠、成長に合った遊びなど様々な観点からアドバイスをすることもあっていました。このことから、保育士は子育てをする親を保育園の中だけでなく支えているのだなと考えました。

そして、この仕事には大変なことも多いけれど嬉しいことも沢山あると教えてくれました。ひとつの例として、保育園に通っていた子どもが成長し、ランドセルや制服を見せに来てくれたり兄弟の迎えやイベントなどの手伝いに来てくれたりと成長した姿を見ることがとても嬉しいそうです。また、大人になり子どもが生まれ、その子どももまた同じ保育園へと通い始めることは保育の仕事が続けていて良かったと喜びを感じると話してくれました。私はその話を聞いて「保育士」という仕事は子どもの未来をつくり、命を受け継いでいく大切な仕事であり、そこには親と先生の間に必要な信頼と子どもに対する愛があるのだなと思いました。

近年、共働き世代の増加などから子どものための福祉施設、特に保育園の重要性が高まっています。福祉において保育士は大切な仕事のひとつであり、親とともに子どもの未来を支えています。保育士には責任感や観察力などが必要であり、命を預かる仕事なため、簡単な仕事ではありません。しかし、自分たちが過ごす未来のためには欠かせない仕事です。私はそんな保育士という仕事に尊敬と憧れをもつと同時に、将来自分が大人になったら誰かの助け

になるような、未来を繋いでいけるような仕事に
きたいと思いました。

佳作

「福祉」ってなに？

文命中学校

3年

矢内 やない 結佳 ゆか

みなさんは、「福祉」とは何か考えたことはありますか？きつと、よく耳にする「福祉」という言葉ですが、一体何を指すのでしょうか。一体どんな概念なのでしょうか。ではまず、「福祉施設」は誰が使うでしょう。障がいのある人、お年寄りと考ええる人が多いと思います。私もそうです。でも、だからと言って「私には福祉は関係ない」と切り捨ててしまつて良いのでしょうか。私のひいおばあちゃんは、介護施設に入っています。私のお母さんは、小学校で支援員として働いています。私にとって関係ないものではありません。そして、きつとほとんどの人が福祉というものに少しでも関わっていると思つています。福祉施設以外にも、福祉の設備は町中にあります。例えば点字です。点字は、ルイ・ブライユという人がつくつた、目に障がいがあり字が読めない

い人でも触ることで字が読める設備です。実はルイ・ブライユさん自身も失明しており、本が読めなくて困つていたため点字をつくつたそうです。私は、きつとルイ・ブライユさんの中には「少しでも不便をなくしたい」という思いがあつたんじゃないかなと考えました。その思いは、近年話題になっているバリアフリーやユニバーサルデザインと同じです。「障がいのある人の壁を取りのぞく」「どんな人でも使いやすいものを」そういった、「障がいのあるなしに関係なく、老若男女全ての人に不便のない生活を送らせてあげたい」という思いこそが福祉なのであり、これを具現化させたものがバリアフリーな設備、ユニバーサルデザインを使用した商品なのだと思います。そしてもっと簡単に言うと「困つて人を助けてあげたい」という思いやりの心です。介護士さんなどは、そういった思いで仕事をしているのではないのでしょうか。「多様性」といった言葉もこれと同じと考えられます。ただどまだ、この多様性は完全に人々の心にあるとは言いきれないと思います。私はこうして文を書くときや人前でしゃべるときに一人称は「私」ですが友達や家族としゃべるときに一人称は「僕」です。親しい友達はどう慣れ

ているので何も言わないでいてくれますが、初めて会う人などには大体「なんで『僕』なの？」と聞いてきます。私はこういうとき返答に困ってしまいます。なぜなら、自分でも分からないからです。他にも、私の学校では数年後に制服が変更されるそうです。サンブルや画像では、ネクタイとリボン、スカートとスラックスを選べるというふうになっていました。それでも、実際に導入したら「本当はスラックスをはきたいけどスカートにする」という女の子も出てくるのではないでしょう。逆のパターンもあるでしょう。それはなぜか。まだ自分自身を含め全員の人がいやりの気持ちを持っているわけではないからです。「だれかに笑われるかもしれない」「バカにされるかもしれない」そういった恐れのお持ちが大きくなってしまうと、誰もが一歩ふみ出せずに我慢をしてしまうのです。私は、誰かがこういう不必要な我慢をしないように、友達でも友達でなくても困っていたり悩んでいたら助けてあげられる、それができなくても相談に乗ってあげられるような、思いやりのある人になりたいです。

開成町福祉作文コンクール入選作品集(令和 7 年度版)

令和 7 年 10 月発行

発 行 者 社会福祉法人開成町社会福祉協議会

神奈川県共同募金会開成町支会

〒258-0021 足柄上郡開成町吉田島 1043-1 開成町福祉会館内

電話 0465 (82) 5222



この冊子は、神奈川県共同募金会の配分金を活用してつくられました。